

神鋼創立七十年に思う

井上 義海

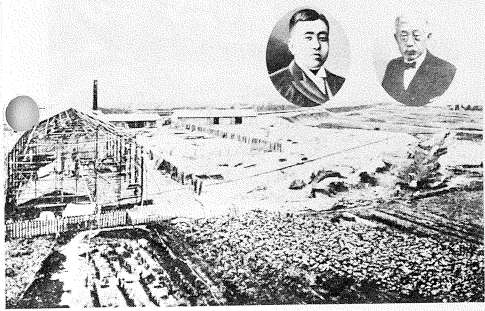
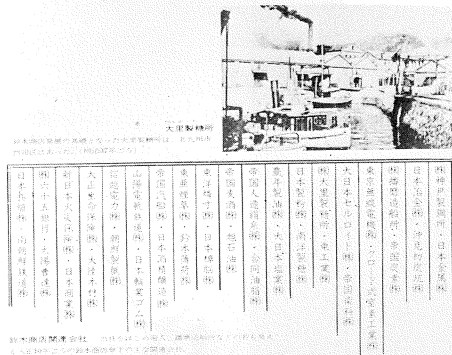
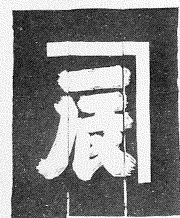
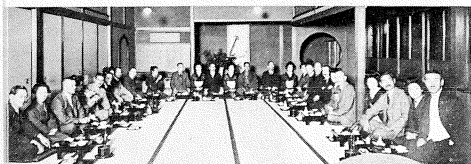
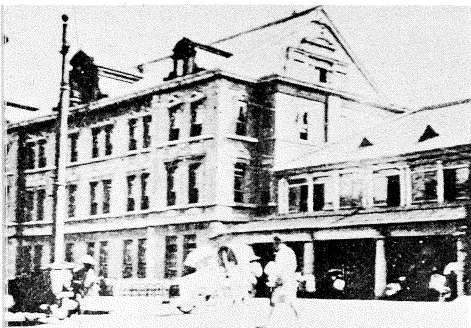
神戸製鋼所創立七十周年を迎えるにあたり一言ご挨拶申し上げます。

神戸製鋼所は、明治三十八年九月一日、神戸脇浜においてさ、やかな鑄鍛工場として孤島の声をあげたのでありますが、爾来七十年、幾多の風雪に耐えて幸いにして今日、我々国代表的な重工業メーカーとしての地歩を築くに至ったのであります。

今日の、当社の姿を思うにつけ、七十年の歴史の礎となられた多くの先輩諸兄、そして当社に対し有形無形のご支援を賜りました関係各位に対し衷心から感謝の意を表するものであります。企業の新しい在り方が摸索されている現代にあつては、企業がその実態をあまりとことなく、世に問うことは、我々企業人に課せられた重大なる責務であると考え、ここに当社の七十年の歴史を編纂し、皆さんに御紹介することといたします。

何卒当社の歴史、現況、そして将来への抱負の一端をご理解いただき倍旧の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

(一九七四年九月一日)
【写真は神鋼70年史の巻頭にカラーで掲載されている鈴木商店】



辰の話

神戸製鋼外史(1)

脇浜埋め立てのころ

橋を作るにしても、海を埋め立てるにしても、昔は人柱を埋めるといふ風習があつた。

平清盛が兵庫の中の島を埋め立てるとき、松王丸という子供を人身御供に捧げたという話が残っている。このときは生身の人間の人柱であつたが、大正の

初めごろでも人身御供のかわりに人形を埋める風習が残つていた。山手工場が手狭になつて来た大正四年十月、神戸製鋼は脇浜の海岸を埋め立てて、海岸工場を建設することになった。

「人身御供は昔のはなし、それは迷信やという人も、たくさんいてはりました。けれど、工事の途中、なんぞが起つたら、やっぱり人柱を入れなだためやと、いう人も出てきました。会社の人なら何かと問題があつてはいけません。私の名前を書いた人形を、埋めとくなはれ」と名乗り出たものがある。

三輪徳太郎という人物である。初代三輪運輸の社長というより親方だったこの人と、田宮さんとの出会いは面白い。

田宮さんが、金子直吉さんの命により神戸製鋼支配人として着任した明治三十八年ごろ、この辺りを仕切つていた三輪徳太郎は田宮さんに会いに行った。

「なんぞ仕事さしとくなはれ」「お前は、聞けばなかなかの暴れん坊らしいが、今日からそういうことには縁を切つてまじめに正業につくというのならうちの運送の仕事をさすがどうか」「やります」

徳太郎は約束した。彼は生涯田宮さんとの約束を破らなかつた。大正二年ごろ、神戸製鋼にはじめてのストライキが起つた。川崎造船の大ストライキの余波だった。要は賃金あげろという要求だ

つた。

その時のストは相当荒れていた。ストとはそんなものかと、製鋼所の従業員たちも日まじりに先鋭化していた。

今日の十時ごろ、門を破つてストの連中がおしかけてくる、という情報を聞いた三輪徳太郎は、『田宮さんを守らんとあかん』今のファウドラの正門の前に体のでっかい三輪徳太郎、ほかに五、六人田宮さんの前にずらつと並んで手ぐすねひいた。

「話がこじれたら、田宮はん逃げなはれ。向こうが暴れたら、私らのちにかけても食いとめまっさかいに」

まるで田宮親衛隊のように三輪徳太郎らは田宮さんを守り、献身的な奉仕をいとわなかつた。「田宮さんのためなら生命はいらん」これは彼の口ぐせだった。

その三輪徳太郎の人形を作り、墨くろくろと三輪徳太郎と書いて脇浜の海にしずめた。

瀬戸内海の島から積み込まれた土砂が何ばいも何ばいも脇浜の海に運ばれた。工事は順調に進んだ。大正八年一月、約三年かかつて埋め立て工事は完成した。

一、二〇〇トプレス運ぶ

海岸工場がまだできていない大正二年ごろ、脇浜の海岸は、東神戸唯一の海水浴場であつた。

砂浜に波が打ちよせ、みどりの松並木は潮風に鳴り、漁師の舟が一ぱい舫(もや)つていた。山手工場への機械や、スクラップ、また工場からの製品の積み出しなどがあつても、まだ荷上げのための岸壁があるわけでもなく、ただ荷役場が作つてあるだけだった。

荷役場についた機械や製品を運搬する方法がおもしろい。ともかく三、四メートルの品物があがると、それに見合う台車を作り、牛と馬と人間と三位一体となつて国道を渡り阪神電車の踏み切りを渡つて山手工場まで運んで登る。

牛はその辺りにいる「チヨロコイ」牛ではない。でっかい大牛で、こいつをまん中において、その両側を、これまた足の太い大きいばん馬が二頭、牛をはさんで両側につく。その外を二本、ロープを引っぱって、そこへ作業の終わった労務者全部が珠数のようにつながって体制をかためる。

「ヤレツ!!」
頭(かしら)が声をかけると牛も馬も人もいつせいに引張る。山手工場の門につくまでぎつと二時間、それは一苦勞だった。
三ノ以上の品物が着くと「カグラ」で巻いて板を敷き、コロをおいて引き上げる。

あの神戸製鋼の一時代を画した田宮さんの一、二〇〇ノプレスも、分解してこのように運び上げられた。

この作業は昼間はできない。

今の本社の前を阪神電車が走っていた。地下にもぐり込んだのはずつとあとのことで、製品はこの阪神の線路を渡って行かなければならない。だから、ひとまず踏み切りの手前まで運んでおいて、夜中阪神電車の終電が通ったとたん踏み切りを渡る。
もちろん、事前に阪神電車まで、「これこれの品物を何時に踏み切りを渡す」と許可をとっておかなければならない。

昭和五年、これはなんとも不合理だというのが、三菱商事を通じてアメリカからトラックの牽引(けんいん)車を三輪運輸が買入れた。日本ではその当時、その車を含めて二台か三台しかなかった牽引車だった。

クレインがない時分のことだ。スクラップの陸上げもすべて人の肩に頼っていた。ハシケから陸にかけた長い板の橋を、ヒヨイヒヨイヒヨイと調子をとりながら渡って行く。

スクラップの山を作るのも人力、すべて人夫が山の上まで持って上がるのだった。

主にこの仕事を請け負ったのが、今の島田工業の前身、岩屋の網元だった島田文一郎だった。

神鋼七十年史を祝う

今回神戸製鋼所七十年を記念として、清楚なる装幀のもとに、他社に見られない社史を編纂され創業初期からの歴史絵巻を繰りひろげ、今日の神鋼の風雪をまのあたり座右にその輝きを見ることの喜びは誠に欣快に堪えません。

殊に編纂委員の御苦心にて、わが辰巳会の実態に就いても特筆頂いたことを深く感謝申し上げます。「膳所の城」は一日にしてならず」その格言通り勇往邁進現在の発展目まぐるしき社運の隆昌、洋々たる前途に一層の弥栄を御祝申上ぐる。(編)

謹賀新年 昭和50年 元旦	
大阪曹達株式会社	坂本財地
三好軍次	千八六〇 熊本市下通二一五一十二 電話(〇九六三)五三一五八五六
大阪市西区江戸堀一丁目五十三番地 電話(〇六)四四三二五五〇一	

金融恐慌と鈴木商店倒産

(読売新聞の阪神五十年⑦⑧転載)

震災手形引き金パニック拡大

第一次大戦後の慢性的な不況の中で迎えた昭和二年、全国に金融恐慌が広がった。阪神間も例外ではなく、この恐慌の中にのみ込まれた。金融恐慌は同年一月、時の若槻内閣が震災手形の解決を図る

ため国会に提出した二法案がきっかけだが、この審議の過程で、阪神間とも関係の深かった神戸、鈴木商店の倒産という大事件を引き起こし、パニックを拡大する。

豊年製油清水工場

金融恐慌の引き金となった震災手形というのは関東大震災の事後措置としてつくったもの。震災前に銀行が割り引いた手形のうち、震災で決済できなくなったものを日本銀行が再割引して銀行の損失を救い、日銀の受ける損害は一億円を限度と

して政府が補償、大正十四年九月末までに整理させるといったものだった。

しかし、この震災手形の中には、戦後不況で決済不能となった不良手形も多かった。しかも手形の整理は期限まで完了せず、若槻内閣は昭和二年一月、期限の二年延長と、日銀への補償増額を認める法案を提出した。この法案を審議中の三月十四日、片岡蔵相が衆議院で「東京渡辺銀行が不良貸し付けを抱えて危険だ」と口をすべらせたことから取り付け騒ぎに発展。たちまち全国の中小銀行に波及した。第一次大戦を「大正時代の天佑」として続々生まれた成り金の不良企業を強引に整理しようとした国の政策の失敗だった。

この年四月五日、神戸に本拠を置いた鈴木商店も破産した。最盛時の関連企業八十二社、整理当時でも四十数社を数える同商店の倒産がもたらした波紋は、戦後最大といわれた山陽特殊鋼、その記録を更新した今年の日本熱学倒産の比ではなかった。

鈴木商店は、明治の初め、大阪・船場で砂糖、籐(とう)製品、ベツ甲などの問屋をしていた「辰巳屋」に奉公していた鈴木岩治郎が、のれん分けをもらい、神戸の弁天浜で砂糖商を始めたのがその起り。これを一大企業に育てたのが高知県出身の番頭金子直吉(昭和十九年、七十九歳のとき神戸で死去)である。

金子は土佐の士族の出だが、生家が没落。祝詞(のりと)で文字を覚えながら、郷里で砂糖、質商をしていた。明治十九年、のち、金子とともに鈴木商店の興隆に力を尽くした古参番頭柳田富士松の紹介で神戸に出てきて鈴木商店に入った。

明治二十七年、岩治郎の死後は、柳田とともに、未亡人ヨネを助けて事業を拡大、大正年間の急成長で、一時は既存財閥三井、三菱をしのぐ一大コンツェルンを形成、大正六、七年には兵庫郡鳴尾村(西宮市)など三か所にわが国初の食用油製造工場(のちに豊年製油として分離独立)を建設、尼崎港を神戸、大阪を上回る一大商港にしようとした計画するなど、阪神間とのつながりは深かった。

金子が事業拡大で目をつけたのは当時有力な貿易品目であった台